

## ▲ ▲ ▲ 意地と執念で登った雪の磐梯山 (1816m) ▲ ▲ ▲

赤澤 東洋

◎山行期日：2020年3月31日

◎メンバー：単独



(道の駅より表磐梯山)

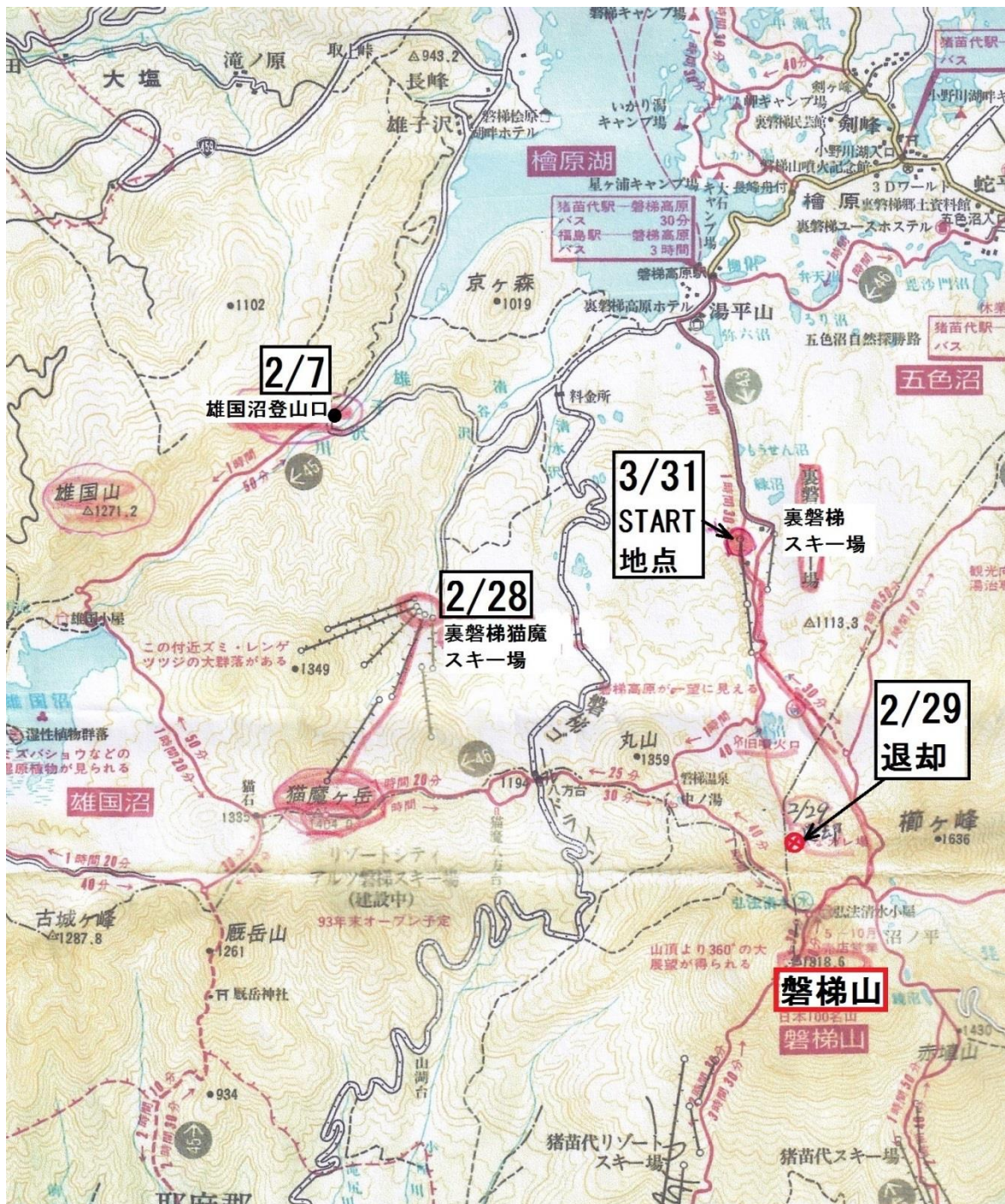
「ヨッシャー！やったぞ！！」狙い通りの快晴の下、漸く雪の磐梯山の頂上に立つ事が叶いくこれぞ我が会心の山行と私はニンマリし、小さく快哉を叫んだ。2020年3月31日11時20分、三度目の正直で遂に登れた冬の磐梯山、自分にもまだこれだけの元気さが残っていた事に満足し自画自賛したのだった。間もなく78歳、たかが磐梯山、されど磐梯山。

記録に残る寡雪で多くのスキー場が雪不足で休業を余儀なくされ、毎年恒例になっている我がスノーシューハイクも行先決まらず宙に浮いたままになっていた。スノーシューを新調し手ぐすね引いて待っているSさん達の顔が目につかび、何とかせねばと焦った末に思いついたのが裏磐梯だった。雄国山とか猫魔ヶ岳、銅沼、イエローフォール、天気良ければ磐梯山も登れるらしい。そういう情報は前から掴んでいたが、少し遠いのが難点でずっと敬遠していたのだが、調べてみると面白そうなので2月初め妻を誘って下見に出かけた。

この時は30㌔程の新雪の中を雄子沢登山口より雄国山(1271m)を目指したが、ラッセル厳しくて稜線に出た地点で退却、帰路裏磐梯スキー場に寄って磐梯山の様子を聞くと結構冬期でも登られている事が分かった。スキー場のリフトも乗車出来るという。これは朗報、早速いつもの仲間に声をかけ皆さんのスケジュールを調整し、天気も良さそうな2月下旬、漸く今シーズン最初のスノーシュー山行が実現した。

気になるコロナウイルスは「広く外出自粛を求める」という政府方針は発表されたものの、クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」では乗客の下船が始まり、埼玉県の場合、感染者はわずか4名のみという状況下、まだまだ危機感は薄かった。





2月28日西武線保谷駅集合、Iさんの愛車1台に5人という「3密」となったがく心は久方ぶりの雪山にありで、誰も感染を気にする風もなく一路裏磐梯へと向かった。

その日は猫魔スキー場のリフト2本を乗り継ぎ、猫魔ヶ岳(1404m)へ。ゲレンデトップからわずか15分の急登はへっぴり腰でアゴを出したが、いい足慣らしが出来た。

2日目、いよいよ磐梯山。ここでも裏磐梯スキー場のリフト2本を乗り継ぎ登山口へ。曇天でうすら寒い中、リフトを降りると2人連れがスノーシューの準備をしていたので声をかけると彼らも磐梯山へ行くと言う。<これは助かった>とばかり彼らの後を追う事にしたが、それは失敗だった。銅沼(あかぬま)を過ぎ、今も有毒ガスを噴き出す1888(明治21)年爆発の旧噴火口跡を右に見ながら雪原を直進するトレースは、爆裂火口壁へ取付き天狗岩左岩稜の凹状ルンゼを目指すバリエーションルートだった。折から単独行者が下ってきてアイゼンを外していたが、ここはもう我らスノーシューの出る幕なしと悟



り、すごすごと退却せざるを得ない結果となった。これはよく確かめもせず他人の後を追ったリーダーの判断ミス、老齢で焼きが回ったかと反省するばかり。

帰路川上温泉付近からそれまで姿を見せなかった磐梯山頂上が顔を出し、車窓から望む尖がった頂きは大変に恰好良く、登れなかった悔しさが増したのだった。

(火口壁と天狗岩⇒)



3月に入りコロナ禍はいよいよ深刻な状況となる中、谷川岳、威守松山と順調に山行を重ねたが、どうしても気になるのが撤退した磐梯山で、己の失敗が納得できず、目に焼き付いたあの尖った山頂は夢にまで出てきて、来年までは待てなくなった。山は逃げなくても、トシが待てなくしてしまう切実な現実。もう今しかないではないか。

早速ウイルス感染を受けない為に仲間は誘わず単独行、他人との接触を避け宿には泊らず車中泊と決め、関東・東北に季節外れの降雪をみた3月29日(日)夕方出発する。

この日、会津地区の山間部では20~30㌢の降雪があり、ベースとする2016年開業の道の駅「猪苗代」も除雪間に合わず真っ白、ラッセルの厳しさが窺えて、1日目に予定した磐梯山を2日目に回し、30日は近くの川桁山(1413m)を目指す事にした。

出来れば奇妙な山名の天狗角力取山(1327m)も登ろうと思ったが、それはく大甘のトンチキ>、深雪で観音寺林道を歩かねばならず、厳しいラッセルにわずか3kmに2時間40分もかかり戦意喪失、1日目は川桁山の登山口を覗いただけで退却し翌日の本番に備えた。

3月31日いよいよ本番の日。4時起床。気温0度、視界数十㌢の濃霧だが、夜中は星が出ていたので夜明けと共に晴れるに違いないと前向き志向で裏磐梯スキー場へと向った。

磐梯山をターゲットと定めて2ヶ月間で三度目の裏磐梯、ここで又途中撤退ではあまりにお粗末すぎるので本気度全開、標高900mのスキーセンター脇でアイゼン付けて6時20分出発する。今日はスキー場の休業日、リフトは利用できないので下から歩くしかないのだが、リフト2本分歩いて



(ゲレンデ正面に磐梯山)

も40分位だ。早朝の濃霧はすっかり消えて、見上げる先には荒々しい爆裂火口壁の上にチョコッと磐梯山の頂上顔が覗かしている。三度目にして漸くお目見えのその全容に規模は違うにしてもナムチェバザールの展望台から望むヌブチェの先のエベレストに見えなくもないなあと、新しい発見に独り悦に入り感激する。振り返れば眼下に桧原湖、朝日に輝く西吾妻山等、雪も締まっっていてコンディションは最高だ。



(何となくエベレスト風⇒の磐梯山・・・)



(ナムチェバザール展望台からヌプツェの後ろにエベレスト)

ゲレンデを登り詰め、左手の銅沼入口の標識に従い樹林帯に入ると先行者のトレースがあり、これは目論見通りとほくそ笑む。磐梯山を今日に回したのは正解だったようだ。

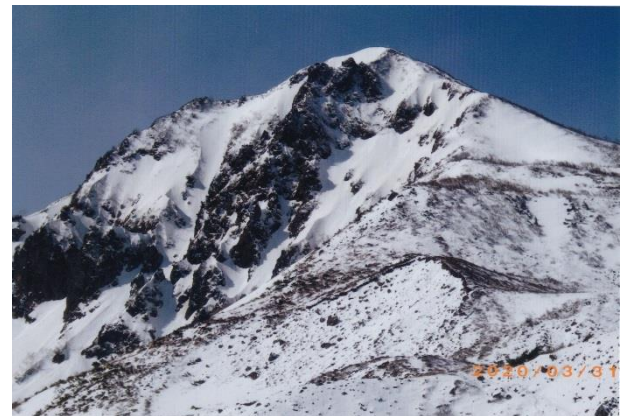
銅沼は全面凍結していれば沼の上を渡れるとの事だが、今日は左端の薄い樹林帯を詰めていき、雪原には出ずにイエローフォールの手前から尾根に取りついた。ピンクのリボンが目印だ。ここで単独行の若者に追いつかれた。しっかりした足取りで元気なものだ。

樹林帯の中、踏み跡はさらに明瞭となり、雪も締まっっていてツボ足でもズボッと踏み抜く事もなく条件は良いのだが、いかんせん急登の連続は苦しくて何度も立ち止まり息を整える。荷物は極力軽くしてきたのにこの息苦しきは何なんだ、引き返そうかと弱気の虫が頭をもたげ心が折れそうになるが、そんな弱気でどうする！？こんなチャンスはもう二度とないぞと己を叱咤激励する。稜線近く鉄棒の逆U字型手すりが並んで出てくるとさらに斜度がきつくなり立ち止まる頻度が増したが、やがて疎林の急登を登りきると稜線に出た。

楡ヶ峰(1636m)と磐梯山の鞍部で駐車場から約3時間、ヤレヤレだったが、ここで凛々しく聳える磐梯山の頂上が初めて見えて、疲れが吹き飛んだ。想像していた以上の迫力でこの景色を見たかったのだ。黒々と岩肌を晒す急峻な東壁はクライマーの登攀対象になっているらしい。これで勇気倍増、まだ先は長そうだが、水を飲み、改めて気合が入った。



(楡ヶ峰鞍部より磐梯山)



(クライミングの対象になっている東壁)

独立峰の磐梯山は風が強く、稜線上は強風で雪が飛ばされ岩くず交じりの雪稜となっていてアイゼンがガリガリし歩き難いが、スノーシューでは尚更歩き難いだろうと思う。

沼の平分岐を過ぎ右手に屹立する天狗岩は少し下り気味に左へトラバースしていくと、朝追い抜かれ



た単独行者がもう下ってきた。なんて早いのだ。その若さが眩しい。沼ノ平方面から登ってくる人が見え、表側から登るルートも幾つかありやってみたいものと思うが、老齡の身にこの先そんな余裕あるだろうか。

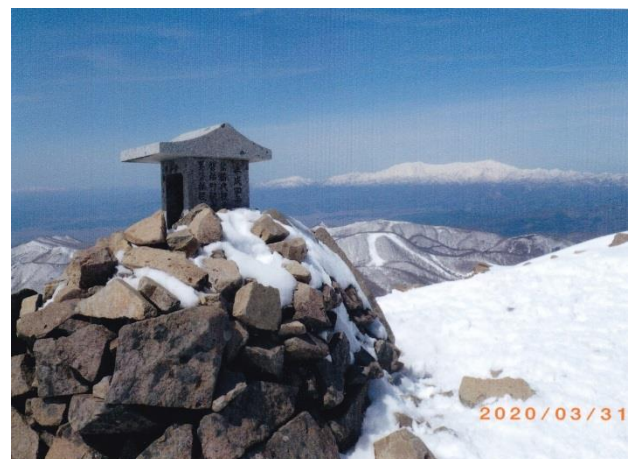
10:40 弘法清水小屋着。61年前を思い出す。あれは1959（昭和34）年、高校2年生の夏、クラスの仲間3人と桧原湖でキャンプし朝飯も食わずに駆け足で登ってやれと飛び出したはいいが、寝不足に加え、空きっ腹と喉の渇きでへろへろになり、何とか辿り着いたこの小屋で漸くありついた朝飯代りの蕎麦の不味かった事、1杯25円位だったと記憶するが、欠食児童でも手を出さないような代物、あれは何だったのか。

しばし小休止後、小屋前に荷物をデポし、カメラと水筒だけを手に空身で頂上に向かった。小屋から上は急に雪が深くなったが、ここも踏み跡が沢山あってツボ足でも問題なく通過し11:20頂上着。出発から5時間はかかり過ぎだろうが、この歳だ、我ながらよくぞ頑張ったもので、これぞ意地と執念の賜物<我が会心の山>ではと自画自賛する。度々の退却続きで腐っていたが、これで全て雲散霧消だ。

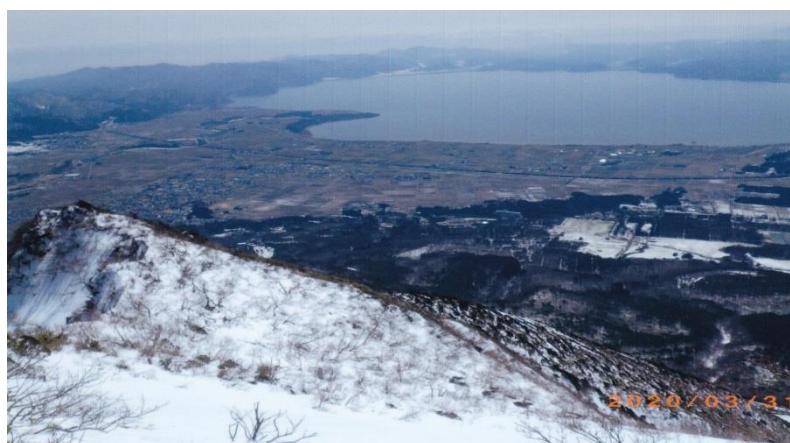
南面眼下には光る猪苗代湖の巨大な広がり、目を左に転じれば安達太良連峰、一切経～西吾妻、桧原湖の右手遠くに鳥海山、月山、朝日山地、飯豊連峰、その手前に猫魔ヶ岳と続き、さらには御神楽、守門、遠く火打、妙高、越後駒、巻機、会津駒、燧、日光白根、男体、那須と関東以北から東北中部までの主な山が全て同定出来た。「百名山パノラマ案内・白山書房刊」に拠る。西吾妻の影に隠れる蔵王だけが見えないのは残念だったが、狙い通り遮るものは何もない360度の大展望、こういうご褒美があるから山はやめられないのである。この景色を皆と共有したかったなあとつくづくと思ったものだ。



(猫魔ヶ岳の向うに飯豊連峰が・・・)



(磐梯山頂上、奥は飯豊連峰)



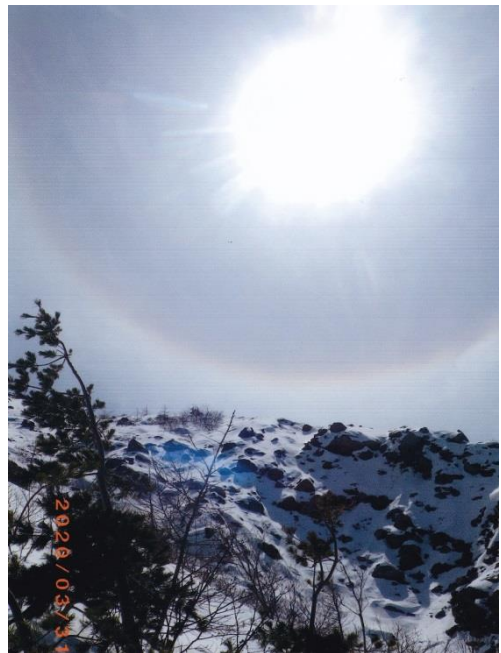
(眼下に横たわる猪苗代湖)

十分に眺望を満喫し満ち足りた気分下山にかかったが、櫛ヶ峰分岐を過ぎ樹林帯の下りにかかるると太陽に陰りが見え振り返ると稜線上に「日暈」(にちうん)現象が現れていた。太陽を光源として周囲に生じる光の輪という珍しい現象で、これも今回の収穫、山行に良き彩を添えてくれたと幸運に感謝する。

2時間程でゲレンデに出て振り返ると、山頂はもう厚い雲に覆われていたので山の天気は変わり易い事を実感、地方には<ひがさがかかると雨が近い>という言い伝えがあるらしく、天気は下り坂のようだ。

14時下山、思った以上にいい山だった。見かけた登山者は12~3人、3人組の若者、2人連れ1組の他は全て単独行者で足元はアイゼンが多く、スノーシューは2~3人だった。

雪山を目指す高齢者にはお勧めの磐梯山、少し遠いのが難点です。



(彩を添えてくれた日暈)

《コースタイム》

6:20 裏磐梯スキー場駐車場—7:00 銅沼入口—8:00 登山口—9:15 櫛ヶ峰分岐—  
10:40 弘法清水—11:20 磐梯山 11:40—12:30 櫛ヶ峰分岐—14:00 駐車場

(了)